

張愛玲の作品における「理想的な女性」について

朱 珊

一 はじめに

1943年4月、張愛玲は「沉香屑 第一炉香」をきっかけに一躍有名になった。彼女は辛辣な描写で、30、40年代における、人間性と欲望の間で迷走し、圧迫され、落ちぶれてしまう人物を描いた。1943年から1951年までに、張愛玲は22篇の小説を創作した。筆者はこの22篇の作品における代表的な女性人物を分析し、その性格及び生き方により、女性登場人物を6つのタイプにまとめた⁽¹⁾。「新時代と旧家庭の狭間に消える女性たち」、「新生活を求める女性」、「人間性の「悪」を強調する女性」、「理想的な女性」、「性を求める女性」、「自己満足な愛を持つ女性」である。本稿では、「理想的な女性」について考察する。「理想的な女性」とは、一般的に認識される様々な美德を兼ね、優しく前向きであり、周囲への気配りがよく、善良な性質を持つ女性である。中国語で「正面人物」と呼ばれるものである。

デビュー当初、張愛玲の作品は色鮮やかで、ストーリーは曲折に富み、反響を呼んだ。当時、彼女が作品に描く家庭は、時代の流れに巻き込まれ、いとも容易く崩れさってしまうものであった。「東方(中国)のことが好きな人にとって、彼らが好んでいるものこそ私が暴きたいものである。」⁽²⁾と張愛玲は暗い人生を描く理由を自ら語っている。

西洋人が好む東方とはいったいどんなものであろうか。英語圏で最も多くの読者を持つと思われる林語堂⁽³⁾の作品を参考としよう、例えば『京華煙雲』や、『朱門』などの小説では、纏足の女性、四世同堂の場面、奥まった邸宅にある

ひっそりとした閨房、両親の絶対的な支配力などが描かれる。これこそが中国の伝統文化の典型だと思われた。だから、林語堂は姚木蘭⁽⁴⁾を描き、張愛玲は曹七巧を描いた。張愛玲作品の特徴は「悪」の人間性を描くことである。彼女は冷静で緻密な描写を用い、人間の利己的で複雑な本性を表現する。張愛玲の「運命と欲望」に対する考えは深く現実的である。作品では人間性の弱みに着目する。換言とすれば、「悪の人間性」が登場人物の運命を左右する。例えば、「沉香屑 第一炉香」の葛薇龍、「金鎖記」の七巧など、運命に翻弄され、欲望に溺れる人物である。それに対して、「桂花蒸 阿小悲秋」の丁阿小、「十八春」の顧曼楨と「小艾」の小艾は優しく、他の女性人物と対照的で、明らかに「理想的な女性」である。このような人物は張の作品において極めて少ない。本稿では、作品の創作背景と作家の経歴を踏まえ、陰湿な人物を描くことを得意とする張愛玲がなぜこの三人の「理想的な女性」を創作したのかを考察する。

なお、本文中の中国語引用は『張愛玲全集』（北京十月文芸出版社／北京出版集團 2012年）に拠る。

二 丁阿小——複雑な人間性を持つ女性について

1944年9月、張愛玲は「桂花蒸 阿小悲秋」⁽⁵⁾を執筆する。同年12月『苦竹』⁽⁶⁾の第二期に発表した。小説は上海で働いている蘇州出身の女中丁阿小の一日を描いている。特に、丁阿小の動きを中心に、周りの人との会話の場面を描写している。

小説の基調は「悲」である。忙しい生活の中で主人公の微かな寂しく悲しい気持ちたちが時々現れる。雇い主の「哥兒達」に対する皮肉でユーモアたっぷりの描写と対照的に、主人公の「悲」はより一層下層階級である主人公の辛い生活を強調する。

主人公の阿小の描写について、批評家は以下のように評価している。宋家広は『走進荒涼』の中で、この小説が下層社会の労働者の忙しい一日を描いたストーリーであると解釈した⁽⁷⁾。邵迎建はこの小説が母性を表現し、博愛を表現するものと考察した⁽⁸⁾。余遜涛は、阿小を語り手としてとらえ、女性が男

性の欲望により支配される現実を描いていると分析した⁽⁹⁾。崔琦は阿小の雇い主「哥兒達」に対する態度から分析し、彼女の一見自立的な生き方が、実質的には奴隷意識を持っていると批判した⁽¹⁰⁾。宋家広と余遜涛の意見に関しては、筆者は適切と思う。それらを参考にしながら、張愛玲の創作当初の状況に基づき、阿小という人物を考察する。

1942年、香港から上海に戻った張愛玲は経済的に厳しかったため、外国の読者に中国人の生活を紹介する英語の文章を発表し、原稿料を稼いで生活をしていった。1943年、『紫蘿蘭』⁽¹¹⁾の編集長である周瘦鹃⁽¹²⁾に認められ、最初の作品「沉香屑 第一炉香」を発表した。同年、張愛玲は数々の小説を創作し、上海において最も有名な女性作家になった。張愛玲は自らが金に敏感であることをよく語っている。

「私はお金が好きだ。それはお金に関して痛い目にあったことがなく、お金の悪い所は知らなくて、便利さだけ知っているからだ。……だから、「拜金主義」という言葉を知っているから、私はまさに自分が拜金主義者であることを認め、このままで生きていきたい」⁽¹³⁾

1943年5月から1944年の年末に渡り、張愛玲は16篇の小説を発表した。ここで注目したいのは、『紫蘿蘭』への投稿がたった五カ月で終わってしまったことである。『紫蘿蘭』に掲載されたのは第一篇の「沉香屑 第一炉香」と第二篇の「沉香屑 第二炉香」のみである。第三篇の「茉莉香片」から、張愛玲は『雑誌』⁽¹⁴⁾、『天地』⁽¹⁵⁾などの雑誌にも投稿を始めた。なぜ張愛玲は『紫蘿蘭』との付き合いをやめたのか。宋以朗⁽¹⁶⁾は『宋家客厅——从錢鐘書到張愛玲』⁽¹⁷⁾の中に、こう書いている。

「張愛玲は「若いうちに有名になったほうがいい」と思っているからこそ、自分の作品をできるだけ早く発表し、できるだけ早く一冊の本にまとめて出版したかったのである。しかし、雑誌は売り上げの問題があるため、人

気のある作品を連載し、読者の注目を集めていた。周瘦鹃ももちろんこのような考えであった。その結果、張愛玲は大変不満を覚え、原稿の提供を辞めただけでなく、何十年も後の小説の中で周瘦鹃が「自分の才能を認めてくれない」⁽¹⁸⁾と書いた。週刊誌のこのような運営方法があるからこそ、張愛玲は一部の週刊誌に束縛されたくなかったので、様々な週刊誌に投稿した。結局、彼女は本当にいち早く有名になった。⁽¹⁹⁾

『伝奇』⁽²⁰⁾の発売により、張愛玲は最も売れる作家になったが、どのように創作のピークを維持すればいいのか、彼女はずっと模索していた。1944年8月、第13巻第5期の『雑誌』に張のエッセー「写什麼」が掲載された。張愛玲は以下のように書いている。「『プロレタリア階級の物語が書けますか』、ある友達にこう聞かれたことがある。私は考えて、「書けないです。もし女中たちのことであれば、すこし知っているかもしれない」と答えた。」⁽²¹⁾ その1か月後に張愛玲は女中の物語である「桂花蒸 阿小悲秋」を創作した。

下層社会の人物を描く小説といえば、当時よく見られたのは、完全に被害者の立場で弱者の悲惨な境遇を語るものであった。例えば、老舍は『駱駝祥子』に全てを失った人力車夫の祥子を描いた。巴金は『家』に妾の運命に反抗するため、自殺した女中の鳴鳳を描いた。曹禺は『日出』に小東西、翠喜などの圧迫された女性を描いた。しかし、張愛玲はそうしなかった。彼女が描いた阿小は労働者の勤勉で善良的な素質を持つだけでなく、強気で負けず嫌いな性格も兼ね備えている。張はいくつかの場面を通し、阿小の特徴を表現している。

①阿小が出勤する時

三

登場人物：阿小、百順（息子）、哥兒達（雇い主）

②

雇い主の家でいくら忙しくても、阿小は自分の仕事に対して全力を尽くす。彼女は勤勉な労働者である。雇い主にパンを盗んだと誤解されても、阿小はただ「真っ先に顔が真っ赤になった」だけである。この描写は主人公の素朴な一面を表している。しかし、阿小が電話に出るシーンでは、主人公の性格の複

雑さが表れる。阿小は電話の中で中途半端な英語と中国語を混ぜながら、雇い主の彼女たちを上手にごまかし、雇い主に媚びる。使用人として上流社会で流行っている英語を使えることは、阿小の自慢であり、他の使用人と区別する特技でもある。この部分に対して、李玉傑は「阿小は享楽的な生活に同化してしまい、「哥児達」に弄ばれた「李小姐」に同情を寄せたが、雇い主の意思のとおりにごまかした。つまり、阿小は孤高を標榜する裏に自分と雇い主を同一視している。」と分析している⁽²²⁾。筆者は阿小が「享楽的な生活に同化した」のではなく、この世で生きていくための貧者の戦略と考えている。「あの男一人だけで、意地悪い女の十人よりもなお悪い」、「今の彼はますます腐って汚れている」⁽²³⁾ 主人公は「哥児達」が下劣な人間であることは十分認識しており、それと同一視するはずはない。外国人の雇い主と生活しているうちに、英語を少し身につけることは自然なことであり、阿小はそれを使うことは「自分と雇い主を同一視している」ということではなく、雇い主を満足させる使用人になりたいからである。雇い主と女中の上下関係に従い、裏では文句があっても、阿小は自分の仕事に決して手抜きはしない。

②午前中仕事をする時～昼ご飯

登場人物：阿小、百順（息子）、秀琴（女中）、阿媽（女中）、老媽媽（女中）

この部分の登場人物は阿小の息子を除き、全員使用人である。阿小は仕事しながら、訪ねてきた秀琴と雑談し、秀琴の悩みを聞く。そして、後から来た阿媽や老媽媽と食事した。この部分は阿小を中心にし、会話が展開される。阿小は面倒見のよい姉御のように、友達の秀琴に女中の仕事を紹介する。それは、同じ立場にいる人に対して助け合う気持ちがあるからだ。しかし一方、阿小はひたすら善良な女性として描かれているわけではない。例えば、秀琴から結婚の相談を持ち掛けられ、金の結婚指輪が用意してくれないと、結婚したくない話を聞くと、阿小は自分が結婚する時、結納すらもらえず、長い間夫の扶養を受けていないことを思い出し、悲しくなった。ここの阿小は心配りができる姉御ではなく、羨ましがりながら嫉妬する女になった。張愛玲は主人公の怒りた

くても怒られなくて、嫉妬しながら不平を漏らす心理活動を「冷たい言葉を言いたくても言えない」と描写した。そして、阿小は引越してきた金持ちの新婚夫婦の豪華な嫁入り道具や優雅な生活を大げさに話すことで、秀琴を惨めな気持ちにさせた。この描写により、主人公が優しい性格でありながら、負けず嫌いな複雑な性格を一層表している。

また、食料品が足りない時期でも阿小がご飯を用意して友達を招待する場面がある。張愛玲はこの行動を「彼女は面子を重んじている。」と説明したが、筆者は主人公が思いやりがあるからこそ、物質が貧しい時期でも人を呼んでもてなす行動をとると考える。これと同様に、小説の後半に書かれた阿小は雇い主の粗末な晩餐を見るに見かね、配給された自分の小麦粉を使う場面も、主人公の思いやりのある行動を表した。

③午後仕事をする時

登場人物：阿小、百順（息子）、男人（夫）

阿小が夫に秀琴の結婚式の格式を話すシーンにおいて、阿小の喪失感と夫の無関心な反応は対照的である。頼りにできない夫がいるからこそ、強気で負けず嫌いの主人公がいる。阿小にはまだ守るべき幼い息子がいる。雇い主を満足させ、勤勉に働き、空気を読める女中になることが、あたりまえなのだ。また、阿小は息子に口が悪いが、愛情のこもったしつけである。その息子は怖がることなく、終始甘えている。読者に優しい母親のイメージを印象づける。

以上をまとめてみると、確かに、主人公は性格にさまざまな欠点があるが、良い人と判断できるだろう。情けない雇い主に対しても、同じ使用人の友達に対しても、阿小は思いやりがあり、善良である。負けず嫌いで、虚栄を張る部分があるが、素直さを持っている。阿小は厳しい生活を受け入れ、努力しながら前に進んでいる。それは息子に勉強させ、立派な人間になってほしいからだ。張愛玲の作品に登場する人物としては、阿小は比較的「理想的な女性」と言えるだろう。だが、張愛玲はこの下層階級の物語をそれほど気に入らなかったようである。彼女は「写什麼」に以下のように書いた。「その後、ほかのところ

で聞いた話によると、女中はプロレタリア階級に入らないことが分かった。幸い、私は作風を変えるつもりはなかったが、そうじゃなければ、とてもがっかりしたと思う⁽²⁴⁾。張愛玲は「理想的な女性」を描写することにより、やはり「悪」の人間性を深く掘り出すことが得意であった。

三 顧曼楨——理想的な女性について

1950年、張愛玲は長編小説「十八春」を創作し、夏衍が主宰する『亦報』⁽²⁵⁾に連載を始めた。「親日派の妻」であった張愛玲はますます厳しい状況に向かっていった。彼女は「梁京」というペンネームにし、今までの鮮やかで、辛辣な筆遣いを変え、穏やかで簡潔な叙述をもって、顧曼楨と許世鈞の恋愛悲劇を語った。

顧曼楨は庶民家庭に生まれ、父親の死後、姉が家族を養うため水商売を始めた。複雑な環境で育てられた曼楨は優しく、自立的な女性である。彼女は中流家庭の息子許世鈞と出会って恋に落ちた。しかし、純粋な曼楨は姉の曼璐に騙され、姉の夫に暴行され、約一年間監禁された。その後、彼女は難産のために入院するも、看護の間隙を縫って逃げ出した。自由になった曼楨は世鈞の結婚を知ってショックを受け、身を隠し、働きながら生きていた。姉が病死した後、息子も重い病気で倒れた。彼女は看病のため、息子のそばに戻ってきた。その後、曼楨は母親としての責任を取り、姉の夫と結婚し、強い母親に成長していた。新中国成立後、十八年ぶりに世鈞と再会した彼女は、青年時代の繊細であり、柔弱な女性から意志の強い女性に変わり、世鈞と一緒に東北の建設を支援しに向かった。

中国現代文学史上、1949年から1966年の十七年間は「十七年文学」と呼ばれている。その特徴は文学作品に文学的な趣より、政治意識が求められた。当時の流行っていた題材は約三種類ある。共産主義をたたえるもの、戦争や昔の苦難を思い出すもの及び資本主義や封建制度と戦うものである。⁽²⁶⁾

先に挙げた「十八春」のように、「理想的な女性」が不幸な目にあう物語は当時最も人の心を動かすストーリーであった。主人公の姉である曼璐は自分が妊娠できないため、夫に捨てられることに怯えている。彼女は妹の曼楨を自分の代わりに、夫の「子孫を残す」という伝統的な考えを持っており、それゆえ曼楨を犠

性にした。姉妹の母親は中国に数千年で称賛された「夫権」⁽²⁷⁾と「三従四徳」⁽²⁸⁾に洗脳されており、曼璐の行動は仕方がなく、正しいと認めた。そして、十八年後に昔の恋人や友たちと一緒に新中国を建設する結末は国の呼びかけにこたえる共産主義に相応しい結末である。張愛玲はこの小説をもって、作家の席に戻った。

しかし、彼女はこの作品に満足していたわけではなかった。1966年、アメリカに渡った張愛玲は「革命的な」結末を書き改めた。そして、二人が再会するまでの時間を十八年から十四年に変え、かつて愛し合った顧曼楨と許世鈞は戻れない時間に対して無言の涙を流すことしかできない。小説の名前も「半生縁」に変更された。「十八春」と「半生縁」の時間設定はほぼ同じである。注目すべきポイントは1937年8月13日であり、第二次上海事変が起こる日である。この作品（二つのバージョンとも）において、唯一はっきり示された時間である。再会の時間を変更したことに関して、筆者は張愛玲が主人公と共産主義の中国との関係を切りたいと思っていたと考える。もし、「十八春」の設定時間通りにストーリーを展開すると、曼楨と世鈞の再会は1949年以後になる。そうしたら、二人の運命はどうなるだろう。「赤い色の中国」は、二人の悲恋に似合わない。「十八春」によく現れる「心の中の闘争」や「革命の大家庭」のような張愛玲らしくない言葉を1950年当時の彼女は使わざるを得なかったが、1966年アメリカにいる張愛玲にはもう政治上の配慮は不必要だった。張の作品を一覧すると、人生や、家庭及び愛情には希望を与えないことが分かる。彼女にとって現実味がある結末を書きたいとすれば、中国人民共和国成立後より、その前に設定する必要がある。それが張愛玲の一貫した作風である。1930年代から40年代の中国において、比較的平和な時期は1945年8月～1946年6月であり、1946年6月から国共内戦が始まり、中国国内の情勢は再び厳しくなっていた。ほかの人物の動きと主人公の運命を含めて考えれば、終戦後という設定が張にとって適切なのではないだろうか。曼楨と世鈞が十四年間耐えた寂しさや苦勞、いかんともし難いせつない気持ちを語り合うところで、「半生縁」の物語は終わる。

張愛玲はかつての複雑な人間性の設定から一変し、「十八春」において曼楨の

ような「理想的な女性」を描き出した。青年時代の曼楨は優しくて穏やかである。彼女は自立しながら家族の面倒をみる。姉の夫に暴行された後、体も精神もぼろぼろになった曼楨は身を隠し、悲しみと屈辱を背負いながら生きる。自分を暴行した姉の夫と結婚する部分は曼楨の耐え忍ぶ精神と母性愛を表現している。

「突然彼女は身をかがめて赤ちゃんの顔に恋しくて何度も口づけをした。彼女は自分とこの子は生と死の境目で慌しく出会い、すぐに分かれることになる。しかし今は彼女と彼は世界で最も親しいと感じた。」⁽²⁹⁾

この描写は曼楨が難産した後、病院から逃げ出す直前の心理描写である。曼楨にとって、自分の尊厳と人格を踏みにじられて産んだ子供は憎むべきものであるはずが、思わず母性が湧いてくる。その後、曼楨が自らの尊厳を犠牲にし、姉の夫と結婚したのは、一人の母親として、自分の子供のそばに戻りたいからであった。曼楨は母親としての現実を受け入れた。このような私心のない母性愛を描写する小説は張愛玲作品において稀である。彼女の作品では、冷酷で利己的な母親像が多い。例えば、「连环套」の霓喜、「金鎖記」の曹七巧などが挙げられる。唯一母親の温もりが感じられるのは丁阿小であるが、先に述べたように、丁阿小にも若干欠点がある。顧曼楨は張愛玲作品において、唯一完璧である女性と言えるだろう。

四 小艾——平板に描いた理想的な女性について

1951年11月、張愛玲は『亦報』に「小艾」の連載を始めた。この小説は新中国の模範的な作品である。主人公小艾は幼い頃に売られ、席家の小間使いになった。未成年の小艾は主人の五太太から虐待され、十五、六歳の時、五太太の夫に暴行され、妊娠し、妾に殴られ、流産した。その後、小艾の体はなかなか快復できなかった。大人になった小艾はやっと好きな人と結婚したが、昔流産したために、なかなか子供ができなかった。そこで、血縁関係のない女の子を養

子にし、愛情をこめて育てた。戦争のため夫婦は離れ離れになったが、中華人民共和国が成立した後、小艾はよい治療を受けてようやく妊娠する。張愛玲はこの小説において不屈の女性を描いた。子供時代の小艾はとても単純で質朴な子であり、少女時代の彼女は勤勉で善良である。大人になった小艾は自ら好きな人を選び、今後の生活を歩む勇気と強さに満ちている。この小説では、「この、人を食う社会に対してより一層の認識ができた」、「今、本当に人民のために動いている」などの時代感の強い表現がよく使われる。このような表現は張愛玲の作品にしては非常に違和感がある。張愛玲は時代の変革に応じて「小艾」を創作し、理想的な人間性を持つ女性を描いたが、作品としては成功したとは言えない。

1950年代の中国において、古い社会制度に圧迫された人物を描くのは極普通のやり方である。下層社会の人々が不幸になる原因について、作家たちは国民党による腐敗統治や、家父長制とよく結びつけた。「十八春」とほぼ同じ時期に創作した「小艾」も「十七年文学」の典型的な作品である。小艾はとても純粋で温厚な女性である。注目すべきは、悪人の五太太や夫に関する描写とは対照的に、小艾に関する描写が大変簡潔であることである。張愛玲は淡淡とした筆致でこの「封建制度」に圧迫された身寄りが無い女の子を描くと同時に、「夫権」と「三従四徳」に圧迫された五太太も描き出した。特に、五太太に関する叙述は相当豊かである。権力を握っていないゆえに、小艾を虐待して自分のストレスを発散する五太太は、意気地なしで、周囲の人の機嫌を取ることでしかない人物である。五太太の不遇は旧式の婚姻や、獣にも劣る夫などの原因だけではなく、彼女自身の性格も一つの要因である。作品の前半では、小艾より五太太を中心にストーリーが展開し、五太太の視点から席家の転落が述べられ、彼女の不遇を通してその時代における人々の不幸が再現される。この小説では、小艾と五太太に関する描写はほぼ同じぐらいの紙面を占めている。張愛玲は偽善者である五太太を生き生きと描き出したが、小艾の描き方は硬く平板である。この作品は全部で70章あり、五太太が亡くなってからの20章を除き、前の50章は五太太を中心人物としても成り立つ。

そして、「小艾」にも二つの結末がある。一つは、中華人民共和国が成立後、小艾の体が適切な治療を受けて回復し、最後に妊娠して一家が幸せな暮らしを始めるというもので、これは1951年11月4日～1952年1月24日の上海『亦報』に連載されたものである。もう一つの結末は流産した小艾が治療を受けられず、重い病気にかかり、最後に病院に向かうというものである。こちらは1987年に香港『明報月刊』に掲載されたもので、章節を調整し、台湾の『聯合報』の副刊に掲載される時にさらに修正され、同年の5月に台湾皇冠出版社が出版した『余韻』に収載された。「半生縁」と同様に、主人公の運命を読者に任せ、余韻のある結末は張愛玲がかつて用いたスタイルである。

五 おわりに

ここまで見てきたことを基に、張愛玲の「理想的な女性」の特徴をまとめてみよう。阿小の複雑で立体的な描写と比べ、曼楨と小艾の人物設定は単に「良い人」である。彼女ら三人の共通点は母性愛であり、妥協しないのは彼女たちの特徴である。困窮する生活に対して、この三人の女性はだれも逃げようとしなかった。彼女たちは自ら強くなり、変化しつつ生活に対応し、自分がどんな現状に陥ろうとも、苦難を受け入れ、諦めずに前に進んでいく。

かつての個人主義者であり、人間性について決して楽観的な考えを持っていなかった張愛玲は、なぜこの三人のような「理想的な女性」を創作したのだろう。筆者はそれぞれの創作の時期と背景を踏まえ、その原因を考察する。

「阿小」について

まず、張愛玲はさまざまなテーマにチャレンジする作家である。彼女の作品を一覧にしてみると、お嬢さまが売春婦に墮落する物語や、エレクトラ・コンプレックスに関する男女関係や、父親のコントロールから逃げ出せない息子など、多様な題材が取られていることが分かる。本稿の分析により、1944年の張は「プロレタリア階級の物語」を試してみようと思ひ、「桂花蒸 阿小悲秋」を発表した。しかし、この主人公は平凡で、旧社会や不公平な制度と戦っ

ている人物ではなく、複雑な性格を人物として描かれている。作品を執筆した1944年秋の張愛玲は自分の作家生活にしても、胡蘭成⁽³⁰⁾との私生活にしても、順風満帆であった。彼女は思いのままに創作し、さまざまなチャレンジを行って自分のスタイルを保った。張愛玲にとって、作品の売れ行きは何より大切なことであった。「私は林語堂より有名になる」⁽³¹⁾ 読者の目を意識するからこそ、自分が書き慣れていない「プロレタリア階級の物語」を書いてみたが、結局個人のスタイルに拘りすぎて、プロレタリア階級らしくない人物を創作した。1944年12月、「桂花蒸 阿小悲秋」の発表と同期に、張愛玲は『苦竹』に「自我的文章」を発表し、こう語った。

「私の小説において、「金鎖記」の曹七巧を除き、残されたのは一貫していない人物ばかりである（原文：不徹底的人物）。彼らは英雄ではなく、この時代を背負っている大勢の人々だ。……一般的に言われている〈時代の記念碑〉のような作品は、私は書けないし、試してみようという気持ちもない。……私は男女に関する些細なことしか書かない。私の作品には、戦争というものはないし、革命というものもない。」⁽³²⁾

阿小はまさしく「一貫していない人物」である。下層社会の労働者として雇い主や、社会制度に対して反抗せず、低い姿勢で生きて行く。だが同時に、阿小は強い女性で、立派な母親である。「桂花蒸 阿小悲秋」はまだ張が金銭的にも精神的にも余裕がある時期の創作であり、作家のスタイルがきちんと保たれている。張愛玲は読者市場を考慮して、労働者の物語にチャレンジした。結果は張愛玲作風らしい阿小を描き出すこととなる一方で、いわゆる純粋な「プロレタリア階級の物語」は作れなかった。

「曼楨」と「小文」について

中国人民共和国成立後の張愛玲はもう「プロレタリア階級の物語」を創作せざるを得ない状況になった。1949年に北京で中華全国文芸工作者代表大会が

開催され、中国文壇は「赤色の共産主義」の一色に染まった。個人主義である張愛玲は元々左翼作家たちとまったく相容れず、更に元夫のために、強く批判されることもあった。この時期は張愛玲にとって大変敏感な時期であり、自分の作風を保ったまま創作するのは大変難しいことになった。人間性についての洞察と「悪の人間性」を描くのが旧時代における張愛玲の看板であったが、新時代においては、それは彼女に余計な面倒を招くものでしかなかった。1949年以後の張愛玲は自分の作品で政治的な立場を表明しないと、中国文壇に居場所がなくなることになってしまう。これは張愛玲にとって死活問題である。その苦境から逃れようとする張愛玲は筆名を用い、作風を変え、「十八春」を発表し、その次に「小艾」を創作した。彼女は再び注目を浴びるようになったが、1943年のような人気を博することはなかった。極端な言い方をすれば、「十八春」と「小艾」は当時の政府と読者の態度を伺い、創作した作品であるが、いずれもうまくいかなかった。その経験は張愛玲に大きな影響を与えたと考えられる。「十八春」と「小艾」はどちらも張が詳しい中流家庭の環境描写から始まるストーリーである。張は当時に相応しい「理想的な女性」の曼璐と小艾を描いたが、作品の前半と後半に大きな違和感が残る。「五太太」や「曼璐」などの悪役の設定は張の一貫していない人間性と一致し、欲望と道徳の間で必死にもがくという人間性の弱みに対する描写は鋭い。特に、弱い女性の持つ悪をリアルに描き出すことにより、張愛玲の人間や伝統的な家庭に対する絶望が読者に伝わってくる。そして、張愛玲本人もこのような「革命的」結末に不満であった。何十年も後に結末を書き換えたことが作家本人の態度を物語っている。書き換えにあたって共産主義的な結末を消し、読者の想像に任せる結末にしたのは、張愛玲が読者市場を配慮し、発行地域（台湾、香港）の政治状況を考慮したためであろう。

張がかつて描いた母親は多様であり、いずれも正常ではない母性であった。なぜ、「桂花蒸 阿小悲秋」、「十八春」と「小艾」の三人の主人公に限って、「偉大な母性愛」を与えられたのだろうか。張愛玲が母性をどのように考えていたのかという問題と併せて、今後の課題としたい。

注

- (1) 朱珊「閉ざされた女性たち——張愛玲前期研究」2014（お茶の水女子大学修士論文）
- (2) 夏志清編注『張愛玲給我的信件』長江文芸出版社 2014年 P13
- (3) 林語堂（1895～1976）：福建省出身、中国の作家、言語学者。欧米に留学後、北京大学などの教授に就任。雑誌『人間世』、『倫語』などを主宰。ユーモア小品文を提唱。著書は『わが国土・我が国民』、『北京好日』（『京華煙雲』Moment in Peking）、「剪払集」など。『デジタル大辞泉』
- (4) 姚木蘭：小説『北京好日』の主人公である。林語堂が理想的な女性として描かれた姚木蘭はお嬢様でありながら、謙虚で周囲の人に愛を与えた。彼女は道家の娘という設定の中、西洋文化に憧れ、女子校に通い、知識や先進的な思想を学んだが、中国伝統的な婦徳を厳守し、まさに良妻賢母である。（筆者注）
- (5) 桂花蒸：旧暦八月は桂の月と呼ばれ、木犀が咲く時で蒸し暑い天気がよくある時期である。「蒸」という漢字を用い、天気の蒸し暑さを表現する。木犀が満開の季節のため、「桂花蒸」（木犀を蒸す）と呼ばれる。この表現は中国の南の地方によく使われている。（筆者注）
- (6) 『苦竹』：（1944年10月～1945年3月）胡蘭成は南京で創設した定期行物。詩、小説、散文などを掲載する。『中国現代文学期刊史論』新華出版社 2005年
- (7) 宋家広『走進荒涼——張愛玲的精神家園』花城出版社 2000年10月
- (8) 邵迎建『伝奇文学と流言人生——一九四〇年代上海・張愛玲の文学』御茶の水書房 2002年10月
- (9) 余遜涛「『桂花蒸 阿小悲秋』的現型分析」塩城師範学院学報 第22巻 第1期 2002年2月
- (10) 崔琦「打趣、曲笔、悲劇时空：从『桂花蒸 阿小悲秋』看張愛玲的悲喜剧艺术」名古屋大学学術機関リポジトリ 2006年
- (11) 『紫蘿蘭』：現代文学期刊、月2回発行する。1925年12月16日に創刊し、1930年6月15日に終刊した。全96期である。小説と隨筆をメインとし、社会の現実を反映する文章が少ない。『中国文学大辞典6』天津人民出版社 1991年

張愛玲の作品における「理想的な女性」について

- (12) 周瘦鹃 (1895～1968)：作家、「鸳鸯蝴蝶派」の代表人物の一人。『中国文学大辞典』天津人民出版社 1991年
- (13) 「童言无忌」『張愛玲典藏全集 8 —— 「散文卷一」 1939～1947年作品』皇冠文化出版有限公司 2001 P67
- (14) 『雜誌』：(1938年 5 月～1945年 8 月)、現代文化定期刊行物、外国の時事評論を翻訳し、それをメインとして掲載する。『中国文学大辞典』天津人民出版社 1991年
- (15) 『天地』：(1943年10月～1945年 6 月) 主編は蘇青。女性が作品を書くことを提唱する雑誌。女性や家庭などの特集を組み、それぞれの作家が自らの観点で執筆する。『中国文学大辞典』天津人民出版社 1991年
- (16) 宋以朗：文芸評論家、翻訳家宋淇の息子。母の邝文美は張愛玲人生の後半の親友であり、父の宋淇は張愛玲がアメリカに行った後のブローカー兼顧問である。張愛玲の遺稿及び遺物は全部宋淇夫婦に保管され、宋以朗は手紙、ノートなどの資料を整理し、現有の資料と家族の談話内容に基づき、『宋家客厅——从錢鐘書到張愛玲』を出版する。(筆者注)
- (17) 宋以朗『宋家客厅——从錢鐘書到張愛玲』花城出版社 2015年 4 月
- (18) 張愛玲の自伝的小説『小團圓』のこと。30年以上も前に執筆されるも、出版されないまま世を去ったが、2011年 10月に皇冠文化出版有限公司から出版する。(筆者注)
- (19) 宋以朗『宋家客厅——从錢鐘書到張愛玲』宋以朗 花城出版社 2015年4月 P277
- (20) 『伝奇』：1944年 8 月15日に初版され、1943年～1944年に張愛玲が発表した十篇の短編、中編小説を収載。『伝奇』は張愛玲の大陸時代において唯一出版された作品集、彼女の傑作の集大成。(筆者注)
- (21) 「写什麼」『張愛玲典藏全集 8 —— 「散文卷一」 1939～1947年作品』皇冠文化出版有限公司 2001 P157
- (22) 李玉傑「逆风“飞扬”中的“安穩”姿态——张爱玲『桂花蒸 阿小悲秋』对底层写作的启示」『青年作家 (中外文芸版)』第 5 期 (下半月) 総第352期 2010年

- (23) 翻訳参考 邵迎建『伝奇文学と流言人生——一九四〇年代上海・張愛玲の文学』御茶の水書房 2002年10月 P150
- (24) 「写什麼」『張愛玲典藏全集8——「散文卷一」1939~1947年作品』皇冠文化出版有限公司 2001 P157
- (25) 『亦報』：(1949~1952)、上海が解放した初期に出版された民間経営の小型日刊紙。上海地方誌
- (26) 「十七年文学」に関して、『中国当代文学史教程』と『中国当代文学史』に参考する。陳思和『中国当代文学史教程』復旦大学出版社 1999年 洪子誠『中国当代文学史』北京大学出版社 1999年
- (27) 「夫権」：父系の家族制度において、結婚後夫が妻を統治し、支配する権利である。
- (28) 「三従四徳」：昔、女性が従うべき三つの道と、守るべき四つの徳目。三従：家にあつては父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子従う。四徳：「婦徳」（品德）、「婦言」（言葉）、「婦容」（姿態）、「婦功」（家事）をさす。
- (29) 「半生縁」『張愛玲典藏全集1——「小説卷一」』皇冠文化出版有限公司 2001 P327
- (30) 胡蘭成（1906年~1981年）：本名は胡積蕊、中国浙江省の紹興の出身。中国の近代作家で、日中戦争の際、汪精卫政府の傘下に入り、賣国賊と見られる。1950年には日本に渡り、晩年には台湾の文化学院教授になったこともあった。1981年、東京で亡くなった。
- (31) 「私語」『張愛玲典藏全集8——「散文卷一」1939~1947年作品』皇冠文化出版有限公司 2001 P179
- (32) 「自己的文章」『張愛玲典藏全集8——「散文卷一」1939~1947年作品』皇冠文化出版有限公司 2001 P89~P91